

小説「北の街に春風が吹く～ある町の鉄道の話～」(概要版)

この小説はフィクションです。登場する人物、地名、団体名、ストーリー、その他設定などは実在のものとは一切関係なく、架空のものです。

作者コメント

この作品は北海道のある小さな町で廃線の危機を迎えた線路を守りたいと頑張っている方たちへ送る作品です。今、利用者の減少から地方鉄道は元気を無くしつつあります。このままでは近い将来、北海道そして日本全国で廃止される線路が増えていくようにも危惧しています。地方鉄道の現状を顧みれば、その改善には新しい鉄道を「創造する力」が必要です。そのため、今回は限らない創造力を盛り込んで小説として仕上げてみました。一般的な作品として描いていますので、たくさんの方に読んで頂いて鉄道や将来の暮らし方について考えるきっかけとして頂きたいと思います。

小説あらすじ

北海道の小さな町、沼太町。この町を走る鉄道の留萌線は利用者の減少から廃線の危機を迎えていた。しかし、大学生活を終えて地元に戻ってきた石井圭吾と吉田あかりは久しぶりに利用した鉄道の変貌ぶりに驚く。また、そのきっかけを父、石井雄二が関係していることも知る。

ふたりは列車や駅、そして旅行の目的地であった動物園で楽しい時を過ごすうちにお互いの距離を少しずつ縮めていく。車内では相席した老夫婦と楽しく列車旅を過ごす、ふたりが突然消えてしまう不思議な体験をする。老夫婦が雄二の昔からの知り合いであったことが判明し、三人は既に廃線となった海辺町である足毛まで真相を確かめに行くことに。

雄二は、車中でふたりから鉄道会社との話し合いのことを訊かれ説明を行うことに。そして、……三人は衝撃の事実を知ることになる。

コロナ禍で利用者が激減し、さらなる危機を迎えている北海道の鉄道ではありますが、逆に今だからこそ、地方鉄道の未来について考えてもらいたいと願い書いた作品です。

主な登場人物

名前(別称)	役割	名前(別称)	役割
石井圭介 僕 圭ちゃん	主人公 農産物加工会社に勤務	石井雄二 石ちゃん 石井さんのお父さん 石井産業創造課長 親父	主人公の父 過去に沼太町で勤務
吉田あかり 吉田さん	小中学校時代の同級生	黒岩五郎	駅前食堂マスター
山本さん	主人公が働く会社の先輩	増山大吾	高校の同級生 深河高時代の同じサッカー一部
鈴木北海道知事	北海道知事	大西留萌市長	留萌市長
横田沼太町長	沼太町長		

※ 当作品は転載・転送を歓迎しています。ご興味ある方には是非ご紹介下さい。